
タイトル募集中（今のところ「ハッカー×クラッカー」です）

taka!!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイトル募集中（今のところ「ハッカー×クラッカー」です）

【Nコード】

N5838X

【作者名】

taka!!

【あらすじ】

大阪生まれ、今は東京に住んでいるプロクラッカーの山崎庄一がある日ピザを頼んだ。配達したのは最近ハッキングについて勉強し始めた多田昌史。ベルを鳴らしドアが開くと多田は山崎の後ろのパソコンに興味津々。二人は徐々に距離を狭めていく、、、そしてハッカーとクラッカーは協力してたくさんの裏世界の秘密を暴いていくこととなる。

出会い

「カチカチカチカチ
カチカチカチカチ」

都心から少し離れた6畳1間のアパートの一室から絶え間無くパソコンのハードディスクに書き込む音とキーボードをたたたく音が聞こえてくる。

机にはディスプレイが5個並べてあり椅子にはまだ二十代前半くらいの男が座っている。

しばらくすると画面に「DO YOU WANT TO COPY
? Y/N」と表示された。

男はフラッシュメモリーをパソコンに差し込む。

「これで、、チエックメイト」

そして人差し指を大きく振りかぶり

「カチッ」

Yキーを押す。

すると画面にNow Copyingと表示されメーターが徐々に増え始める。

「これでしばらくは持つやろ」

そう、この男、、俗に言うクラッカーなのだ。

「あつ、そういえばそろそろ来る時間や」

俺の名前は多田 昌史。

普段は大学に通っているが、今日みたいな休みの日はパソコンのパーツを買ったためにピザ屋で宅配のバイトをしている。

この頃パソコンのハッキングにすっかりはまっている、と言ってもまだ始めたばかりだからほとんど何もできないに近い。

しかし家のパソコンではスペックが足りず処理落ちしてしまうためCPUやメモリを増やすためにバイトを始めた。

ついでにハッキングとクラッキングは別物だと知っていただろうか？ハッキングとはいかに早くパスワードを解除できるかというもので犯罪ではないが、クラッキングとは他人のパソコンなどに不正アクセスをするという犯罪行為のことだ。

「はい、じゃあこれ最後に届けて今日は終わりにしていいよ」

「はいっ」

俺は上司に元気良く返事をして配達を始めた。

バイクを走らせること20分、ようやく目的地に着いた。

「ここか、、、」

そこはよくあるアパートだった。

「えーっと、203号室の山崎さんって」

階段を上り扉の前に立つ。

いつもこの時が一番緊張する。

毎回クラスの前で発表するような気分を襲われる。

今日も思いきってベルを鳴らす。

『ピーンポーン』

やがて数秒後

『ガチャ』

鍵が開く音がして

「はい、、、」

俺の目に背後の機器が移った。

『ピーンポーン』

「おつ、来たやんけ」

玄関に行く。

「はい、、、」

待望の食料に期待を膨らませつつ扉を開けると配達員がいた。

「えつと、マルゲリーターつとハバネロピザーつで3120円やっ
たっけ？」

「、、、」

ん？

様子が変や。

どないしたんやろ？

俺は配達員の目線の先にある物を追う。

「あ、、、」

「、、、」

「えつと、、これはその、、、」

「、、、」

まずい、、、

だが並大抵の一般が見てもきつと何をしてるかすらわからないだろ
う。

だから大じよ

「スゲーっ！！みづほ銀行の個人データを書き変えてやがるっ！し
かも使ってるクラックのソースはアメリカのダニエル・ジャクソン
が独自に開発したアルゴリズムが組み込まれてるから逆探知されて
も日本全国からランダムに選ばれたパソコンに変更される、これぞ
完璧なク・ラ・ツ・キ・ン・グ 燃えてキターッ！！ハアハア、
、

全然大丈夫じゃなかったー！！

何でわかるねん！？

しかも目がいつてたし。

こ、、、こいつ、、何者や？

少なくとも普通やないな、、、

しかしそんなことを考えていると

「あれっ！？おらへんっ！！」

いつの間にか視界から配達員が消えていた。

「どこ行きやがった、、、」

嫌な予感を感じながら後ろを振り返ると、、いた。

ディスプレイに向かって何かしている。

「ちよっ、お前何してんねんっ！？」

「ハアハア、ちよっと服を脱がすだけだから。さあ、俺の前に全てをさらけ出すがいい！！」

「人のパソコンをやましい女みたいに扱っなっつ！！」

「君にはそう見えないのかい？まだまだだね」

だめだこいつ、早くなんとかしないと。

つてか、むしろ見えたら最後やる、、

ディスプレイにソースファイルを展開させたりプロパティーを見たりしている。

とにかく早くやめさせないと

「いいねいいねえー、サイコーだよー！！」

「やめれ！！」

「ええじゃないか」

「下手な大阪弁使っなっつ！！」

「おおー、ここはこうなってるのか、、」

「人の話完全スルーツ！？」

「え？なんか言ったー？」

「こいつ今すぐ亡き人にしてやりたいわー！！」

そんな配達員にイライラしていると

「あっ、ヤベツ、時間過ぎちゃった、3120円になります」

「今頃っ！？」

「はーやーくーしーてーよー」

ムカッ

怒りを抑えつつ代金を渡し、ピザを受け取る。

「じゃあこのパソコンに俺のメールアドレス登録しといたから、また今度会おうよ?」

「やだよお前になんか!!」

「そうやって今まで女を振ってきたのねっ!?!」

「アホかつ!!」

「あつ、、、そんな地味だと告白すらされたことないか」

「余計なお世話や!!」

「じゃあまた」

「話し聞けよっ!?!」

配達員は玄関で

「あつ、ついでに俺は多田 昌史。よろしく。」

「俺は、、、つて教えるかつ!!!!」

「いや、これに書いてあるから、山崎さん」

「うつ、、、」

それは領収書だった。

多田はそのままバイクに乗って走り去って行ってしまった。

「何やったねん、、、」

山崎はしばらく呆然としていた。

「ふうー、、、今日は燃えたなー」

家に帰った俺の顔が思わずにやける。

「今度の休日にでもまた行くか、、、」

俺は帰りに買ったCPUをパソコンに取り付け始めるのだった。

「カチカチカチカチ

」

「カリカリカリカリ

」

「そおいえば、あれから今日で一週間やなー、、、」
あれからは一度も連絡が無く家にも来なかった。

「あー、、、ちよっと疲れたわー、、、」

休憩しようとソファーに向かうと

『ピンポン』

「あゝあゝ？誰や、こんな時に？」

疲れた体にムチを打ちドアを開けると

「ヤッホーッ！！」

・
・
・

『バタンッ』

今一番会いたくないやつがいた。

「あれ、、、疲れ過ぎてついに幻覚まで見えるようになってもうた
んかなー、、、少し寝んとな」

『ガンガンガン！！』

今度はドアを叩く音がする。

あまりにしつこいためしようがなくドアを半分開ける。

「なんや？」

「よお、来てみたぜ」

「帰れ」

「酷っ！！この前来るって言ったじゃん！？」

「あれはお前が一方的にした約束やろ！」

「あれ、そうだっけ？まあいいじゃん、上がるよー」

そのまま上がるうとする多田を止める。

「待てや、許可しとらんやろ！？」

「大丈夫大丈夫なんとかなるさ」

「ならへんっ！！」

はあー、しかし引く気もないらしい。

どおしよ、、、

「じゃあ上がつてもええからパソコンいじりなや？」

「オッケー、何も問題はないさ」

「ありありやる、」
多田を上がらせた後、パソコンにロックをかけて寝ることにした。
「じゃあ俺は疲れたから寝るわ」
「おおー、わかった」
ロックかけてるし大丈夫やる。
ああー、、、眠い、、、
俺はそのまま夢の世界に落ちたのであった

さあーで、うるさいのも寝たところだしさっそくパソコンの中身を見てみようか。

そうしてパソコンのディスプレイを見て驚愕した。

「ばっ、ばかなっ!?! ロックがかかっているだっ!?!」

それは山崎が寝る前にかけてたロックだった。

しかししばらくすると多田は余裕の表情で満ちていた。

「H A H A H A こういうこともあろうかと、、、準備万端なのだっ!?!」

リュックからフラッシュメモリーを取り出すとパソコンに差し込む。

「今こそ日頃の成果を示す時だっ!?!」

するとディスプレイにソースファイルが表示され

「それポチッとな」

『カチッ』

Enterキーを押すと画面に凄まじい速度で英数字が書き込まれしばらくすると

『ピッ』

と短い電子音がして「UNLOCK」と表示された。

「よっしゃあー!?!」

俺は小さくガッツポーズをとる。

今まで勉強してきた甲斐があつたな、と歡喜に浸る。

「それでは失礼します」

俺はマイドキュメントからファイルを物色し始めめたのであつた。

「カチカチカチカチ」

俺はキーボードを叩く音で目がさめた。

「、、、あれ？なんでキーボードの音が、、、？」

おもむろにパソコンを見ると

やつがいた。

「まさかっ!!！」

ディスプレイにはソースファイルが表示されておりロックは解除されて
いた。

「多田っ!!！」

すると多田は振り返り

「よお、やっと起きたか」

と爽やかに言い返してきたのだつた

出会い（後書き）

第一話、ご愛読ありがとうございました。

僕は大阪生まれですが今は千葉に住んでいます。なので大阪弁を書くことに難しさはさほど感じませんでした。読者の中には大阪弁に戸惑いがある方もいるかもしれませんがこれからもどうぞよろしくおねがいます。

あと、まだこの小説のタイトルが決まっていなかったので何か案がある方はレビューなどによりしくおねがいたします。

事件発生！？（前書き）

勝手にパソコンを使っていた昌史。しかしそこから思わぬ展開に！

事件発生！？

キモッ！！

・・・なんやこいつ？

早くなんとかせんと

「何してるか、よーわからへんけど、とにかくはよーやめやー」

「俺はマイドキュメントの中身を見てただけだよ？」

「そうか、ならまあええけど、、、」

何でやる、こいつと一緒にあつたら調子狂うなー。

「でもマイドキュメントなんか見て何してたん？」

「ソフトに使われてるソースを見て勉強してたんだよ」

「あれ、お前ってそういう知識あんまりないん？」

「まあ、始めてまだ半年くらいしか経ってないからね」

「ほんだら、俺が教えたるか？」

「えっ、ホントっ！？ありがとー」

あれ、、、いつもやったらこんなことせーへんのかなー、、、

やっぱり調子狂うわ。

かくしてそれから不定期でソース講座が開かれるようになった。

「師匠っ、これは組合せると暗号化されたものも数分で解析できるんじゃないでしょうか？」

「いや、それだけやと不十分や。あとこのアルゴリズムも組み込めんと正常に作動せーへんねん。」

「おおー、それがいるのかー」

そして多田は再び作業に戻る。

「カタカタカタカタ」

しばらくすると

「これってそのアルゴリズムを組み込まなくてもこれを四つ組み合わせさせることでいけるんじゃないか？しかもこれの方が効率がいいし」「それは、、、その通りやな」

「だろ？」

これはたまげたなー、、、

まさかアルゴリズムを使わずにそんなことができるなんて。

こいつ、知識はないがそういうひらめきはやるんちゃうか？
そんなことを考えてしまっ。

「あつ、そういえばもうそろそろ名字で呼びあつの疲れたっていうか、、、」

「どおいうことや？」

「だから下の名前で呼びあわないか？」

「まあ、、、ええけど」

「と、ということ、これからもよろしくな、庄一」

「あ、ああ、よろしゅうな、、、まっ、昌史」

下の名前で呼びあうことに少し気恥ずかしさを覚えつつ呼びあったのだった。

それからというもの一人はハツカーを、もう一人は今以上のクラーカーを目指してお互いに知識と共に友情も徐々に深めあい続けた。

「今日はありがとー」

「ああ、また来たらええ」

「おう、また来る」

短い会話を済ませた後、昌史は帰った。

「ふうー、、、友達ってのもなかなか良いもんだなー」

昔から友達ができなかった庄一にとって友達ができるという経験がなかった。

というよりも欲しいとも思ったことすらなかった。

学校が終わればすぐに家に帰ってはパソコンに向かったりゲームをしていた。

そのうちクラスで虐めが始まり不登校になった。

しかしそうなくても誰も励ましてくれる人はいなかった。

人脈がなかったため当然といえば当然だ。

そうして大学にはぎりがり受かり、最初のほうは通っていたがそのうち行かなくなった。

理由は当然、一人ぼっちだったからだ。

そんな時出会ったのがクラッキングだ。

最初は冗談半分のソースしか載っていないサイトにしか行かなかったがしばらくすると犯罪並のことにまで手を出し始めるようになった。

このままではいけないと思い大学を中退し地元の大阪から東京に出た。

しかしその頃にはすっかり対人恐怖症になっていたため当然仕事なんかできるはずがなかった。

都心から少し離れたアパートを格安で譲り受けてそこで今までずっと過ごしてきた。

そんな時、ピザの配達に来た昌史に出会ったのだ。

対人恐怖症の庄一だったが不思議と昌史とはすらすら話すことができた。

俺はなぜ今まで友達を要らないなどと考えていたのだろうか？

ゲームがあるから？

ネット上の友達がいるから？

いや、違う

本当は心のどこかで欲しいと思っていたのだ。

そして今それがやっと叶ったのだ。

話してるうちにだんだん心が満たされていく。

庄一は後悔した。

もっと学生の中から友達を作り誰とでも積極的に話すべきだったの

だと

「ああー、今日もたくさんのが学べたなー」
実質独学よりかなり効率が良い。

「じゃあ、早速試してみるか」
俺はパソコンの電源をつける。

このパソコンには起動した時にユーザー別にロックがかかっている。
「よし、庄一パソコンの時は解析に1時間くらいかかったからなー、
、どけだけ早くなってるか楽しみだなー」
フラッシュメモリーをパソコンに差し込む。
ファイルは自動で起動するようにしているからさ差し込むだけで大丈夫だ。

すると画面に背景が黒いウィンドウが表示され、英数字が滝のよう
に表示され始めた。

「早いつー!!」
想像してたよりもずっと早く終わりそうだ。

すると画面に「DO YOU WANT BOOST MODE?
Y/N」というカーソルで止まった。

躊躇わずYキーを押す。
直後ファンの音が強くなりCPU使用率が100%になる。

それからウィンドウがいくつも表示され、それぞれが違うことをし
始めた。

それぞれのウィンドウが「READY」から「OK」に徐々に変更さ
れる。

すると一番最初に表示したウィンドウに「UNLOCKED」と表
示された。

「スゲーよ!!!マジばねえー!!!5分で解除するなんてヤベーよ
!!!」

俺はその後プログラムを作り始めた。

「今日はもし相手にクラックされた時の簡単な対処法を教えたる。簡単やけどたいていのクラッカーには十分有効や」

「おっす、よろしく」

今は不定期講義真つ最中だ。

「まず相手にクラックされたとき、ブロックするソフトを事前に作っておく。それはクラックされた時に自動で起動するように設定しておくねん。それに連動してお知らせする警報音とかもつけければ完璧やな。それで足止めしてる間に今度はCPUの使用率を100%にするソフトを起動して相手にCPUを使わせないことや。そうすればブロックを突破されても処理が遅くなつて時間稼ぎになんねん。その間に大事なファイルは暗号化してその他は消すか他に移すべきや。そしたら何も取るもんがなくなるやろ？その時がチャンスや。こっちから逆にクラッキングしたんねん。相手はまさか逆にされるとは思つてもないやろうからな。戦利品がたくさん手に入んねん。どうや？」

「そんな順序があつたなんて、、（ガクブル）」

「まずはそのソフトを作らんな」

「そうだな」

昌史は庄一のパソコンを借りてプログラムを作っていく。

「ブロックするソフトってこんなんでいい？」

プログラムに目を通す。

「、、、、ん？これはどおいうことや？」

そこには到底ブロックには使えそうもないアルゴリズムが組み込まれていたからだ。

「これはブロックするとき使うプログラムのこの部分を破られた時にもう一度その部分だけ複雑なブロックが作動するようにするた

めに入れたんだ。」

そうか、言われて見ればアルゴリズムの間はかなり複雑にしたプログラム用のプログラムが書き込まれている。

「それええな、なかなかやるやん」

「ははは、どうも」

次は、CPUを100%にするためのソフト作り。「これは簡単やる？」

「いや、結構アレンジ加えるのが難しいよ」

「ほうー、アレンジか、、、」

昌史はプログラムを書き込む始める。

しばらくすると

「できたー」

「ほんだらちよつと拝啓させてもらつて」

テキストに目を走らせる。

「ほう、自分のCPUを100%にしながら相手のCPUもできるだけ使って処理させないプログラムか、その発想はなかったなー」

「だろ？相手のことばかり考えてるクラッカーは自分のことになると無防備だからな」

「その通りやな、ほんだら最後は逆にクラッキングするソフトや」

「任せとけっ！！」

しかしこれはなかなか難しいらしく途中で何度もキーを打つ手が止まる。

手伝つたるか、、、いや、こいつならいける！！

いつの間にか庄一は昌史を信じるようになっていた。

「、、、人つてこつとも変わるもんやねんな、、、」

ボソツと呟く。

「ん？何か言つたか？」

「いや、なんでもない」

そのまま見守つた。

.....

・

「できたっ!!」

それからしばらくしてやっとプログラムが完成した。

「ほう、どれどれ、、、」

目を通す、、、と気になるカーソルがあった。

「これは？」

「相手のパソコンにクラッキングが成功した時に自動で一番使用頻度が高いファイルからコピーしていくようにすると、CPUのソフトで奪った相手のCPUも一緒に使えるようにするのを組み込んだ。内側からはウイルスを起動させて全てのファイルを海にいる生き物の画像で上書きするっていうのも組み込んだんだ」

「そ、その最後のつてこの前ニュースで話題になったウイルスじゃ、、、」

「大丈夫、あれはネットの音楽ダウンロードサイトで音楽ファイルとして掲示されていたから作成者は捕まっちゃったんだ」

「そっだそっだ、たしかそんな事件やったな、、、」

「でもそんなウイルスに感染させられたらひとたまりもないな。クラッキングした人かわいそっやな」

「まあそっだな。でもクラックするやつのほうが悪いだろ？」

「なんか今、俺が否定されたような、、、」

「いや、、、そんなつもりは、、、」

「ええよ、、、そんなに気にしてないから大丈夫やで、(グズッ)、、、うん、、、全っ然、気にしてへんし、むしろなんでもかかってこいみたいなの？」

「ゴメンツ、俺が悪かった!!だからそんな落ち込まないでっ!!? なっ?」

「落ち込んでへんもんっ!!」

「わかったわかった、だからそんな騒ぐなって」

「わかったなら、、、よろしい。許したろ」

慰めるのにかなり時間がかかってしまった。

一通り落ち着いたところで

「それにしてもなかなかええ対策ソフトができなやんけ」

「うん、俺もこんなにアレンジできるとは思ってたからなー」

「昌史はプログラムを組む素質があるな」

「そりゃどうも、でもまだまだ庄一には敵わないよ」

「いや、プログラムを組むだけなら昌史のほおがずっと上手いで」

「じゃあ、、、そおいうことにしよう」

素直に認める。

「今日はもう遅いし早く帰りや」

「おう、じゃあな」

そして昌史は帰っていった。

それから3日くらいが経った。

「そろそろ金もなくなってきたしまた追加するか、、、」
いつものソフトを起動する。

「これでよしと、、、」

『ピーーッ!!』

するとパソコンからけたたましい音が鳴った。

「あれっ!?!何でや!?!おかしいっ!」

音の正体はクラッキングされた時、鳴るものだった。

庄一は慌ててCPUの使用率を100%にした。

しかし効果はあまりない。

「こんなこと、、、っ!!まずいつ」

『ピーーッ!!』

再びパソコンから警報音が鳴る。

しかもさっきよりも音が大きい。

これはブロックが突破された時に鳴る音だっ!!

「どうすれば、」

そんな時、ふと昌史が作ったプログラムが頭をよぎった。

「そうだ、、あれやったら、、いけるっ!!」

庄一は慌ててマイドキュメントを開く。

「、、、な、い」

昌史は自分のフラッシュメモリーにデータを移した後、このパソコンから消したんだ。

「こうなったら、」

庄一はケータイに登録していた昌史の電話番号にかける。

数コール後相手が電話に出た。

「どうした？珍しいな」

「緊急事態やつ、理由は後で話すからとにかく昌史がこの前作った対策プログラムを急いで送ってくれっ!!」

事態の深刻さが通じたのだろう。

「わかった。ちよつと待つてる」

それから数十秒後、新着メールが届いた。

「よしっ、これならどうやっ!!?」

庄一はプログラムを全て起動する。

すると画面に「NOW BLOCKING」と表示されしばらくすると「NOW ATTACKING」もカーソルに追加された。

それだけではない。

『CPU...100%』

『ENEMY CPU...37%』

『READY...』

『CONNECTING...』

『NOW ATTACKING PATTERN 1...』

『STOP』

『NOW ATTACKING PATTERN 2...』

『STOP』

『NOW ATTACKING PATTERN 3...』

```

STOP
NOW ATTACKING PATTERN 4
STOP
NOW ATTACKING PATTERN 5
CLEAR
SENDING PROGRAM
READY...
NOW OPENING... TIME LIMIT:150
NOW ATTACKING PATTERN 3
NOW OPENING... TIME LIMIT:138
CLEAR
NOW ATTACKING PATTERN 4
NOW OPENING... TIME LIMIT:82
CLEAR
NOW ATTACKING PATTERN 1
NOW OPENING... TIME LIMIT:45
CLEAR
NOW ATTACKING PATTERN 2
NOW OPENING... TIME LIMIT:18
NOW ATTACKING PATTERN 6
NOW ATTACKING PATTERN 2
NOW OPENING... TIME LIMIT:3
NOW ATTACKING PATTERN 2
NOW OPENING... TIME LIMIT:1
COMPLETE
「はあー、びっくりさせやがって、心臓止まるか思ったやん
たくさん「NOW ATTACKING」と表示されたウインドウ
が出てきてそれぞれが別々の場所に攻撃する。」

```

「そうか、一つのプログラムでアタックするよりも別々にアタックしたほうが効率ええんか。」

すると新しいウィンドウが表示され「DO YOU WANT TO SEND THIS PROGRAM? Y/N」と表示された。

「ん？何のプログラムや？」

詳細を見ると相手のファイルを全て海の生き物の画像で浮気するというプログラムだった。

「ははっ、大手銀行に対してこれはまずいやろ」と言いNキーを押す。

作業はほとんどプログラムが自動でしてくれたため見ているしかなかった。

しばらくすると画面に「FINISH」と表示された。

「やっぱり昌史はプログラムを組む天才やな」

昌史、、、いや、友達に助けられた。

「一つ借りができてしもたな」

庄一は苦笑したのであった。

事件発生！？（後書き）

今回は前回より長めです。また英語が結構出てきたと思いますが誰もがわかるレベルのしか使いませんでした。誤字脱字もあるかと思いますがそれでもし見つけたら教えてください。まだまだ至らないところがたくさんあると思いますが次も読んでくださるとうれしいです。

世界2位のハッカー登場っ！！

「どうだった？」

今、俺は庄一と電話している。

あれから数時間後にまた電話がかかってきて詳しい話を聞いた。

『もお、やばかったわー。まさか逆にクラッキングされるなんて思ってもなかったからなー、でも昌史のソフトのおかげで助かった』

「そうか、そりゃよかった。あれはあの日一緒にプログラム組んだ後にちよつといじくってアタックをより強力にしておいたからな」

『ああー、なんかめっちゃたくさんアタックのウインドウが出てきてたわー』

「だろ？ところであのファイルは送ったか？」

『いや、それしたらさすがにまずいやろ』

「だよなー」

とお互いに笑った。

『じゃあそろそろ疲れたから寝るで』

「おう、じゃあな」

そのまま電話は切れた。

「ああ、そういえば通っている大学でたしかハッキング世界大会で準優勝したやつがいたなー。一度会ってみるか」

俺も明日に備えて寝るのだった。

『キーンコーンカーンコーン』

「はあー、やっと授業終わったー」

しかし今日はこれだけで終わりではない。

昨日思い浮かんだ人に会いに行くのだ。

「えーつと、、、パソコン室か」
サークルの活動場所のポスターを見て呟く。
俺はパソコン室に向かって歩き出した。

「ここかー、、、」

サークルと言っても人数的にぎりぎりらしい。

『コンコン』

『・・・』

中から返事がない。

とにかく入ることにした。

「入りますよー」

しかしドアには鍵がかかっていた。

「あれ、、、今日って休みなのかなー、、、」
と呟くと

「そうよ」

後ろから声がした。

振り返るとそこには見慣れない女性がいた。

見た目は中学生くらいでかなりの口リ。

「今日はサークル休みだけど何か用？」

「いや、ちょっと捜してる人がいて、、、ってかサークルの方ですか？」

「ええそうよ。で、どんな人？」

「あの一、ハッキング世界大会で準優勝した人を、、、」

「あー、それ私、和田香苗よ」

「えっ!?!」

思わぬところで出会った。

「とにかく入って」

女性は鍵を開け中に入ったため俺も一緒に入った。

・

・

・

「お名前は？」

「多田昌史です」

「それで、何の用？」

「あのー、率直に言うとかラッキングについて教えて貰いたくて、」

「、、、どうして？」

まあ、そうだよな。

だから俺は正直に答える。

「半分は自分の興味です。もう半分は友達を守るためです」

「その友達ってのは何をしてるの？」

少し躊躇わって答える。

「クラッキング、、、です」

「、、、クラッキング、、、クラッキング、、、クラッキング、、、」

何やらクラッキングという単語を聞くと顔がほのかに赤くなり、、、目がいつてた

「あのー、、、？」

「いいねクラッキングー！やってやるうじゃない、クラッキングって昔から夢だったんだよねー」

「、、、え？」

「だからやるうって言うてんのっ！！」

「そんなすんなりでいいんですか!？」

「ええ、だってクラッキングとかチヨーかつこいいしっ、クラッカ
ーの顔が見てみたいね」

いや、それに期待はしないほうがいいかと、、、

「とにかく集まりましようよ?」

「まあそうですね。じゃあ住所教えますね」

「遅いじゃないの。どうしたの？」

(どうしたのはお前のほうだろうがー!!)
とはさすがに言えない、、、

「メールをよく読んでなかったんですか？」

和田はケータイを取り出しメールを読み直す。

「ああー、先にお邪魔してよかったってこと？」

「ちげーよ!!、、、じゃなくてちがいますよ!!どこにもそんなこと書いてないじゃないですか!?!待ち合わせ場所は公園だったんです」

思わずタメ口。

「そおいうことねー、、、じゃあとにかくお邪魔しましょうよ」

「話逸らしたっ!?!」

『ピンポン』

俺は和田と一緒にベルを鳴らす。

しばらくすると

「よお、おっ、、、この人が和田さんか。はじめましてー、山崎しよ」

「すごい、このパソコンCore i9搭載でしょ?しかも、、、これはマルチドライブじゃないか!?!いいねいいね、これは来てますよー!?!」

「無視、、、」

「、、昌史よ、この人つてくさ」

「それ以上言っな」

死んでも本人の前で腐れ外道パソコンヲタクなどと口にはいけない。

「ですよー、、、」
「どうする?」
「しばらく見学させといたらええんちゃうか?」
「、、、だな」
それから40分暴走は続いた。

「落ち着いたか?」

「ええ、一応、、、ハアハア」

いや、全然ダメそうだった。

「ところでその人誰?」

「今頃かいつ!!」

「山崎ですよ、、、」

「えっ、なんか思ってたより、、、残念」

「残念で悪かったな!!」

「、、、だから期待するなって言ったのに」

「言ったんかっ!?!」

「、、、まあ」

「、、、」

「、、、」

「、、、」

みんな黙り込んだ。

「なんか、、、ごめんね」

「もぉええねん、、、」

「ところで和田さんってハッキング世界大会で準優勝って聞いたけど実際どれくらいの腕前なんですか?」

「3日で64桁のパスワードを解いたわ」

「64桁だと!?!」

「方法は!?!」

「独自のアルゴリズムを使って一から試していく方法よ。キーボードを打つのは慣れてるから」

「でも64桁を3日で解くって並大抵のタイピングじゃあ無理やで？」

「じゃあ見てなさい」

そらいうとパソコンにエクセルを開く。

そして

『カタカタカタカタ、、、』

凄まじいスピードで文字を打っていく、、、

「、、、すげえ」

「人間技やないな、、、」

一分間で874文字のちゃんとした文章を打った。

「ふふん、どう？わかったでしょ？」

「「あ、ああ、、、」」

予想以上に心強い仲間に驚くのだった

世界2位のハッカー登場っ！！（後書き）

今回は短めです。あと投稿が少し遅れてすみません。二つ作品を投稿してるもので、。。「シルバーi」も投稿してるので是非読んでみて下さい。

三菱銀行クラック作戦？

『カタカタカタカタ』

今日も俺、昌史はプログラムを組んでいる。

、、、

「よし、できた。でもこんな何に使うのかなー？」

目的のソフトが出来上がると俺はフラッシュメモリーにソフトをいれたのだった

『ピンポーン』

鍵が開く音がした。

「よお、会いにきたぞ」

「そおか。今ちょうど和田も呼んだところや」

「和田も来るのか。あいつのタイピングスピードはすごいからな」

事実、和田は世界2位の實力なのだ。

『ピンポーン』

「早っ！！」

「ヤッホー」

「ヤッホーちやうやろ！？」

「何がー？」

「明らかに早いやる！？なんでやねん？」

「私たまたまここらへんいたからよ」

「、、、なんかいろいろと怖いねんけど」

「まあ、そおいうのは気にしない気にしない。」

「、、、ですよねー」

「ところで今日は何するの？」

そうだ、俺も気になっていた。

「今日は

サイトを作る!!」

「、、、」

「、、、」

「、、、何の?」

「そんなん決まってるやん。クラッカーとかハッカーを仲間にするためのサイトや」

「なんでわざわざ?」

「人数は多いほうがええに決まってるやんか」

「まあ、、、ねえ、、、」

「とにかく作るでー!!」

「、、、」

「返事はー?」

「「おー、、、」

ということでサイト作りが始まった。

「具体的にどういう内容にするの?」

「会員登録制やな。でも会員になるためにはパスを解読せんとあかんからある程度の腕前の人しか会員になられへんって仕組みや」

「ああー、だから俺にあんなソフト作らせたのか、、、」
そう言ってフラッシュメモリーを庄一に渡す。

「ありがとーな。これをサイトに組み込むねん」

そしてしばらくサイト作りには庄一は励むのだった、、、

、、、

、、、

「できたでー」

「やつとかー、、、」

3時間以上待たされた。

「試しに入ってみてーや」

「わかった」

Googleで検索しサイトを開く。

すると画面いっぱい

『クラッカー、ハッカー募集中。会員登録はこちら』
と表示された。

「これは、、、」

「どうや?」

ドヤ顔で聞いてくる。

「、、、だめだろ」

「なんでっ!?!」

「何かのいたずらにしか見えないし、、、」

「サイト作るの初めてやったねん、、、」

「なら、、、しょうがない、、、」

「やる?」

「まあ少し様子を見るか」

「会員登録してみるとどうなるの?」

会員登録をクリックしてみる。

画面に

「パスワードを解読せよ」

と表示された。

「ほう、、、これなら普通の人は入れないな」

「何人集まんねんやるーな?」

「様子を見ようか、、、」

「じゃあ、今日は解散ね」

しばらく待つことにした。

一週間後

「よお、来たぜー」

「ヤッホー」

今日はサイトの登録人数を聞いたりするために庄一の家に来ている。

「来たか。まだ2人しか登録されてないねん」

「あつ、それ俺だ」「私も登録してみたのー」

「お前らかいつー!!!」

庄一はがっかりしている。

「じゃあ実質誰もいないってこと？」

「そうなるな」

「(シヨボーン)」

「、、、」

「、、、」

「まあ、、、まだ始めたばかりだしもう少し様子見てみようよ？」

「そ、そうだよな」

「まだまだこれからやな」

「、、、」

「、、、」

「、、、」

「ところで今日は何するの？」

「今日はこの前逃した銀行に再チャレンジや」

「銀行？」

「あー、和田は知らないか」

「俺は生活費をクラッキングして手に入れてるんや」

「へー、でも失敗って？」

「不意を突かれて逆にクラッキングされたねん。まあ、その時は昌

史のプログラムで助かったねんけどな」

「やるねー昌史たん」

「男子にたん付けすんなー!!」

「じゃあ昌史」

「呼び捨て、、、のほうがまだましだな」

「どうでもええやんっ!!」

「これは死活問題であるっ!!!!」

「お前らそういうところだけ息ピッタリやな、、、」

「で、結局銀行にクラッキングして金を得たいのね？」

「まあ、、、」

「じゃあそんな地元のじゃなくてもっと大手の三菱とかにしましよ
うよ??」

「お前は国に喧嘩売るつもりか!??」

「大丈夫でしょー。こっちにはスペシャリストが三人もいるのよー
?」

「国をなめてるよこいつ!!」

「でもなんか行けそうな気が、、、」

「おーい、浮かれるなー」

「行けるわよー」

「うん、俺も何か未知なるものが溢れてきた。」

「それたぶんドーパミン!!」

「えへへへへ、、、」

「危ない人やっ!!」

「とにかく大手銀行の三菱にクラッキングするわよ」

「えへへへへ、、、」「しょうがないなー、、、」

こうして俺らは用意を始めたのだった。

「よし、準備完了。これで逆探知されてもソフトが自動で起動して
守ってくれる」

「そうか、じゃあ昌史が逃げ道を作って俺がアタックして和田が援護する陣形で行くで」

「わかったわ」「了解」

二菱のサイトから特殊なソフトを使いクラッキングを始める。

『CONNECTING...』

、、、

『PASSWORD』

「20桁やとっ!？」

「大丈夫、任せて」

和田が新しいウィンドウを開きキーボードを凄まじいスピードで叩きだす。

『カタカタカタカタカタカタカタ』

「あとどれくらいかかりそうや？」

「、、、5分くらいね」

「、、、え？」

「いくらなんでもそれは無理が、、、」

「いけるわよ」

、、、

、、、

、、、

それは4分が過ぎた頃に起きた。

『ペーーーーーッ!!--!』

三菱銀行クラック作戦？（後書き）

今回も短めです。というかこの長さで毎週が定着してきてしまいました。次も読んでくださるとうれしいです。

次回もお楽しみに……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5838x/>

タイトル募集中（今のところ「ハッカー×クラッカー」です）

2011年11月17日00時38分発行